

ここ十年程、戸谷森の作品を見てきた。展示のたびに作風が変わることにいつも驚かされ、そしてある充実感を抱いて会場を出る。見始めた頃は、抽象化された画面のなかに人と認識できる形象があった。その周囲も、木々が生い茂っているのではないかと想像できたのだが、最近の作品はその形はなにであると指し示すことができない。とはいえ、画面に変化が起きたからといって、戸谷の制作の根底に大きな転換があったとは考えにくい。

画面のなかに人の姿が見えていたとき、戸谷の意識は空間を描くことにあるのだと考えた。そこで、その空間とはなにかが問題となる。彼が見た光景なのか、物語の情景なのか。だが、その後の制作の展開のなかで、人は人として画面に現われず、空間の裏に潜んでしまう。では、絵画平面のなかで線や色彩の関係が発生させる疑似的な空間が描くべき対象だったのか。絵画である限りは、この種の空間は自然発生してしまう。もちろん戸谷は絵画空間を強く意識して描いているに違いない。しかし、その発生のみが目的ではないと画面から読み取るべきだろう。それは、絵画空間を発生させる方法を変化させることで、造られた空間の在り方を操作していると考えられるからだ。

この操作は、疑似的な空間の創出を制作の端緒としつつ、その空間の質量、空間それ自体に触れるために必要な行為なのではないか。絵画という形式を用いて、視覚的に認識するだけではない領域を表そうとしていることになる。ここから戸谷の絵画空間は、色彩を伴った点や線や面が存在する場となる。場のなかで点や線や面は重さを持つ。さらに干渉し合う。重さがあるので、その存在によって場は沈み、もしくは隆起する。また、描かれたものたちは互いの干渉によって微動し、場と摩擦を起こすこととなる。その摩擦が熱を帯び、さらに場を変形させていく。その熱は描かれたものたちによる存在の表明でもある。

その存在を再確認するかのように、戸谷は描いたものたちを切り取り、編み込み、吊るしたこともあった。この場合、その視覚的な存在感を希薄にしようというのか、物体としての軽さが強調される。これは、戸谷がものの存在とその現れの強弱との関係を繊細に検討している証しだろう。そして軽さは、絵画的な奥行きを発生を最小限に留めつつ、場の変形を現わそうという描き方と接続しているかのようだ。

実生活のなかで、ものは大気圧を受け、地球の引力によって重量を持つ。表面は眼に見えない大気の粒子に取り囲まれ、ものが動くことで粒子も動く。動かないものは存在せず、私の身体を構成する粒子も含めて、あらゆるものが振動をしている。その存在と振動が引き起こす場への作用を、戸谷は描く。戸谷の絵画をそのように読んだとき、私の全感覚は開かれていく。

野田尚稔（のだ・なおとし）／世田谷美術館学芸員